

ロシア語テキストにおけるアスペクトの時制 テキスト内の臨場感—〈私・今・ここ〉—の創出（試論）

檜 尾 頌 子

Tense of Aspect in Russian Text
Creation of presence — <I-am-here-now> — within the text (draft)

Kashio Shoko

Summary

You may unconsciously feel presence — <I-am-here-now> — as a reader while you are reading the text. Or, you may have an illusion that a writer is close to you and talks to you with showing his/her presence — <I-am-here-now> — as a writer. We also hear many readers talk about the book which they were impressed that they have experienced the feeling; “This is the book specially written for me.” This article studies this presence — <I-am-here-now> — by focusing on the relationship between this presence — <I-am-here-now> and Russian perfect form. Toshiyuki Yoshida, president of Takasaki City University of Economics gave a congratulatory speech at the commencement ceremony in academic year 2007; “The graduation is not just an end. You are just on the starting line for the new world.” Such a conception “an end is a start for new dimension” is similar to a fundamental function of Russian perfect form. The past tense of Russian perfect form usually deviates from the past status and represents the “Present” status, especially in the conversation. The basic meaning of “Он пришел” (He came) is “Он сейчас здесь” (It means the situation “he is here” has occurred). And Japanese past tense corresponding to “I am here now” (the form ending with ‘-ta’) also means <I-am-here-now>, which is similar to Russian. The author already mentioned some text functions of Russian aspect that fundamental function of past tense of perfect form derivatively have textual functions in the text (1998, 2000, 2004) and this article is the continued work. Russian has two aspects (imperfec/perfect). It has neither specific form of pluperfect form nor present perfect form. Some specialists in other European languages may think that Russian is a language with undeveloped factors. Although Russian is obviously constrained due to its undeveloped morphological factors, the two aspects

appear to play a certain role to create the presence — <I-am-here-now> — by changing the tense into no more than present, past or future (perfect form has only two tenses excluding present tense) even in the complicated literary works such as “the Brothers Karamazov.”

This study is based on the assumptions that Russian aspects, in spite of insufficient morphological factors, can create the <presence> of <I-am-here-now> by making use of rendering effect to <combine and arrange> morphological elements of such small aspects and that Russian text writers may rely heavily on past tense of perfect form and passive particle past tense of its derivative form. This study focuses on the assumption that <combination and arrangement> of past tense of perfect form may be related to the presence — <I-am-here-now> — and aims to demonstrate the cases showing the relationship between the presence — <I-am-here-now> — and past tense of perfect form.

はじめに

テキストを読んでいるときに、読み手としていつのまにか臨場感—〈私・今・ここ〉—を抱かせられることがある。〈私・今・ここ〉を取り上げる理由は、この臨場感—〈私・今・ここ〉—を読み手の内部に生み出す、という要素もテキストの注目点ではないか、と思われるからである。読み手に〈私・今・ここ〉を感じさせるには、指示表現（特に、этот など）、登場人物の〈内言〉^注（ヴィゴツキー 1934 / 2007 : pp.311-343, p.72、バフチン 1963 : pp.205-207, 237, 284-290、茂呂 1999 : pp.118-120）等、いくつもの要因が考えられるが、小稿では、臨場感—〈私・今・ここ〉—とロシア語完了体との関係を主として取り上げる。完了体過去の基本機能がテキストにおいて派生的に別のテキスト機能を発揮することについては、ロシア語アスペクトのテキスト機能として檜尾（1998、2000、2004）で一部触れた。小稿はその継続である。ロシア語はアスペクトは二つ（不完了体／完了体）である。ロシア語には大過去や現在完了の専用形態もない。一見して“形態不足”の不自由さを持ちながら、その二つをせいぜい現在形・過去形・未来形（完了体は時制はふたつのみ）に変えながら、例えば、『カラマーゾフの兄弟』のような入り組んだ内容の大部の本でも、〈私・今・ここ〉という〈臨場感〉を作り出すのに、一定の役割を果たしているものと思われる。〈組み合わせ・配置〉、および、〈参照枠〉（池上 1986）による演出効果が結果的に出ること、〈私・今・ここ〉の〈臨場感〉を創出できるのではないか、その中で、特に、完了体過去形、および、派生の受動分詞短語尾現在形にロシア語テキスト著者たちはかなり頼っているのではないか、という仮説を持つ。小稿では、臨場感—〈私・今・ここ〉—と完了体過去形との関係性についての仮説を裏付けられると思われる事例を提示することで、若干の検証が試みられれば、と考える。

1. 分析観点—臨場感〈私・今・ここ〉の観点からの分析

ボンダルコ（1996）は、〈私・今・ここ〉“я-сейчас-здесь”で体験していることこそ現実における最高のリアルな現場体験である、と指摘している。池上（2000）は、西欧言語を母語とする者と日本語母語者との対比を行いながら、後者は、「私たち自身が当事者として臨場し、直接〈いま〉、〈ここ〉で身を持って体験している構図」とし、それは「もっとも本来の、〈元型〉的な姿」であり、日本語の話し手が「〈元型〉的な体験の構図への拘り」を「西欧的な言語の話し手と較べて、かなり多く保持しているように思える。」と分析している。ロシア語テキストに接する日本語母語者も、この「臨場し、直接〈いま〉、〈ここ〉で身を持って体験」という読み方をしばしばすることも考えられる。その場合、言語形式からの影響、アスペクトの〈組み合わせ・配置〉の影響も臨場感を得る理由のひとつではないか、とも考える。特に、臨場感—〈私・今・ここ〉—に、完了体過去形の〈組み合わせ・配置〉、および、テキスト内の〈参照枠〉（池上 1986）が一定の関与をしているのではないか、について考えてみたい。ロシア語テキストでは、完了体過去の〈私・今・ここ〉の威力に共通してロシア語テキストの著者たちはかなり頼っているのではないか、というのが小稿仮説である。できるだけ言語形式という客観的な事例を元に考えたい。

2. 動詞完了体過去

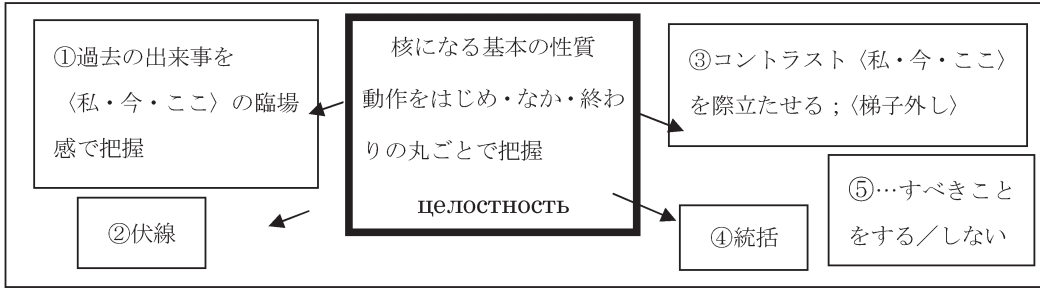
2.1 核となる性質

連文サイズで現れる完了体過去の基本的性質：ロシア語完了体過去形の核となる性質について、A. ボンダルコ（1996）、磯谷（1977）、佐藤（1982）、沼野（1993）、中澤（1994）、原（1998）を参考に挙げると、a. 完了体は事柄を〈はじめ・プロセス・終わり〉すべて、〈丸ごと提示する〉基本的性質を持つ—целостность 統括性・全一性。b. 完了体はもともと継続する状態ではない〈предел／限界・境界〉を本質的に伝える性質のために、テキストにおける発生や終了、または、変化、差異、区別を伝えやすく、新事態の発生、発見、ニュース性、意外性、予測外、も伝える。a. b. により、場面のコントラストを強めるときに、不完了体を背景に完了を対比的に配置することで〈新事態発生〉を「際立たせる」効果を演出する（ボンダルコ 1996）。池上（2007：東京言語研究所夏期講座）は、日英語の〈差異〉、〈区別〉について、（1）個体を際立たせる形で表現、（2）全体を含め、いわばそこに埋没させるような形で表現を指摘し、さらに〈変化〉という概念を加えている。この概念〈変化・差異・区別〉は、ロシア語の完了体テキスト機能を見る場合にも有効であると考えられる。

上記の完了体基本の性質から、下記の派生的用法①②③④⑤がある、と考えられる。

2.2 テキスト機能：(事例は、主として、『カラマーズフの兄弟』から引用)

完了体過去形、完了体由来の受動分詞短語尾現在形によるテキスト内の〈私・今・ここ〉は、核になる *целостность* (動作をはじめ・なか・終わりの丸ごとで把握する) からの派生機能と考えられる。



2.2.1 過去のできごとだが、話者の現在 = 〈私・今・ここ〉にとって問題視すべきこと：

過去に属することであっても、その過去の動作の結果が、話者の現在 = 〈私・今・ここ〉にとってアクチュアルである、無効になっていないときには、完了体過去形になる。

例1) スターリンの政治的肖像を扱った『勝利と悲劇』Сталин понял, что боязнь “коммунистической заразы” будет сильнее голоса рассудка. И он не ошибся. (第I部：p.17) (資1) は、この間に別の話題をはさんで、p.23 にまで関係領域をもっている。特に、Сталин убедился... は、p.17の文述語 понял とテキスト機能面では同義である。読み手は完了体過去によって、読み進めてきたこの時点でのスターリンの〈私・今・ここ〉の心境を捉える（従って、後に変更の可能性がある）。он не ошибся によりスターリンの今の時点での判断に〈著者の視点から評価〉が下されている、と捉えられる。このテキストでは随所に、あるテーマを、他のテーマを間にはさんで再度、別の表現でより具体的に語る、という手法が散在する。それは、ロシア人の思考モデルとされる図（資1）とはやや異なり、むしろ Semitic に近い。作家大江健三郎も、読み手の理解を得る小説作法として「ずれをもたせた繰り返し」を心がけていることを語っている（TBS ラジオ08・3月「伊集院光の日曜日の秘密基地」）。

ドストエフスキーも同様である（2.2.2、3.1.3、亀山2007：5）

例2) 『カラマーズフの兄弟』：『カラマーズフの兄弟』の裁判の場面を例にとると、検事、弁護士が話題にするのは、ほぼ過去のことである。過去を、話者（検事や弁護士、被告）が、人物・できごとの〈私・今・ここ〉にリアルに近づけた展開が有利な場合は、完了過去を使用する傾向がある。裁判で被告人ミーチャ（長男）の弁護人のセリフ：..Что встретил мой клиент, приехав сюда к отцу? 私の依頼人（ミーチャ）が父のところへ来た時、彼はどんな扱いをされたのでしょうか？（資料2）（第4部12編Ⅷ：p.168）→完了過去 встретил によって、読み手は、ミーチャがこの裁判のずっと以前に父の家に来て心理的に受けた心の傷が、この裁判の席において まだ有効性を保ち

問題視すべき、結果残存効果を維持していることを、完了過去によって明示している、と読み手は捉えることができる。なぜなら、過去の結果の残存が、今語っている弁護人や被告ミーチャの〈私・今・ここ〉に切実に関与していないものとして話すなら、不完了過去 *встречал* になるからである。廷内の陪審員は、この完了体過去形によってリアルに頭に映像をえがくことができ、〈父によるミーチャへの対応が今この時点でも結果残存している〉〈私・今・ここ〉として捉える効果をもつ。→ 情状酌量への可能性も期待して完了過去を弁護人は配置している。

話者にとって何十年前のことであろうと、その結果の残存が、今現在話している時点でアクチュアルだ、ということ、または、今話している話題にリアル〈私・今・ここ〉に関係づけるときには、完了過去で表現する。一方、数分前のことを、〈私・今・ここ〉と特に関係づけて話さない、単に数分前にそういう動作があったということを伝える時は不完了過去、になることも少なくない。ただし、“今終わったところ”という終了直後を表現したいときは完了過去になる *вы сейчас упомянули*（第3部9編Ⅵ：p.438）。

類例—心理的に追いつまされていく状況を描くとき（資料3）：登場人物は、過去に視点をおいて〈私・今・ここ〉に引きつけずに平静に語るときは不完了過去で語りはじめるが、奉公人から、父殺しに関してイワンのそそのかしであるかのような言い回しをされると、イワンは過去のできごとが今に関与するものとして〈私・今・ここ〉に引きつけた切羽詰った心理になり、完了過去になる傾向がある。イワンは *Ты подумал тогда* あのときお前はそう思ったのか？ *Ты так понял* お前は（あの時）そう理解したのか！＝完了過去で対応する（第4部11編Ⅶ p.51-53）。一種の〈伏線〉効果ともいえる。なぜなら、イワンは自身がこの時の対話以降、“父殺しのそそのかし”を一層〈私・今・ここ〉に関連させるようになる。ヴィゴツキー（1934）、パフチン（1963）、茂呂（1999）の指摘する〈内言〉発生である。その内心の〈父殺し〉希求（亀山 2007）とその〈そそのかし〉という深層心理を内面で意識化させてテキスト後半で精神的に異常をきたす心理は、イワンの〈内言〉でかなり表現されているが、この場面での不完了過去に〈背景性・以前性〉を持たせつつ完了過去の〈組み合わせ・配置〉のコントラストは、人物のあらたに生起した〈私・今・ここ〉の感情を際立たせ（ボンダルコ 1996）、〈参照枠〉は〈私・今・ここ〉に変わり、後半の精神異常の〈伏線〉（下記）となる。従って、2.2.1 や下記 2.2.2 は機能として重複することもある。イワン（二男）は父殺しに関しての奉公人スメルジャコフとの問答（第4部11編Ⅵ）を不完了体 *знал*（44）で始める。（ ）内は同編Ⅵのページを示す。イワンによる殺人の関与について奉公人のほのめかしが次第に強まっていく *не подумал* → *完 подумал, догадались*（46）、*нашего с вами разговору ...не объявлю*（47）につれて、完了体（47）*случилось, почувствовал* 混在後、不完了体 *чувствовал, не хотел тогда разбирать, чувствовал, хотелось* をサンドイッチにして、完了体 *начали, стал себя спрашивать, сказал, подумалось, овладели, подумал, подумал, подумал*（49）を〈配置〉することで〈差異・変化・発生〉を際立たせ、〈内言〉*«Потому ли, что в душе и я такой же убийца?»*（56）へのプレリュードとなっていく。その後のイワンの精神変調の臨場

感創出を、不完／完を対置させた〈差異・変化〉を背景に完了の〈私・今・ここ〉を強調させる手法で、読み手の〈私・今・ここ〉も活性化する可能性がある。奉公人による不完 желали に対しイワンが完了 подумал тогда? (51) で応じ、不完／完混在 понял (53), хотел (54), хотел, поехал, чувствовал (56), начало чувствоваться が続く。奉公人は、主犯は自分ではなくイワンであるということを完了 поехали (63), заверили (63) を使うことで、イワンの心に止めを刺す。一方、イワンはスメルジャコフとの激しい対話を内面に取り入れ подбивал = 不完過去 = 父殺しのそそのかしについて〈内言〉でスメルジャコフと問答をし、“おれは父殺しを彼にそそのかしたか” 自問する。後半の его научил убить (第4部 12編 V : p.117) は подбивал と同義である。違いは、подбивал が過去の事実の有無しか問いていないが、完了過去 научил で自分がそそのかしたことを結論付け自己を現在の状況に強く結びつけ〈私・今・ここ〉の視点になっている。なお、この поехали はイワン、奉公人が反復使用しているが (54, 63 など)、往復 ездить ではなく完了 поехать によって一方向 (チェルマーシニヤ行き) 一殺人遂行の可能性を保証する一だけを焦点化しているためである。

2.2.2 〈伏線〉効果：

完了体過去形はテキストにおける支配領域が広域に及ぶことも可能である。例：はじめ完了過去で初出し、あとで何かが判明したことを後述するときなど、初出完了過去は〈伏線〉効果を出すことがある。例：(第3部 8編 I : p.330) 完了過去 уловил (とらえる・見て取る・見逃さない) (資4) により、読み手は〈伏線〉を感じる。この уловил (p.330) に対応することが、読み手の予測通り、69ページ先 pp.395-399 に引き継がれ、彼女の軽蔑の表情の意味が解ける (資4)。類例：запомнил (第3部 9編 II : p.411 ; 第4部 11編 VII : p.56)

2.2.3 コントラスト効果：

不完過去に完了過去を配置することで、不完過去が副次的に〈以前性〉や〈先行性〉の機能を帯び、完了過去の〈私・今・ここ〉の機能とのよりコントラストが強まる。例：予審判事のセリフ：Он ..передалотворенную дверь, про которую вы заявили, что она все время, как вы были в саду, оставалась запертою (第3部 9編 VI : p.438) (資5) (彼は ... ドアはすっかり開け放たれていたことに気付いたと証言しているんですが、あなたは、そのドアはあなたが庭にいた間ずっと閉まっていたと (今) おっしゃっていますよね)。不完過去形 оставалась は完了体 заявили より以前のことを示す。過去のことだが、過去の結果を今現在の予審判事が問題視したいため、不完ではなく完了体である。予審判事は、自分の〈私・今・ここ〉を動作主 (ミーチャ) の〈私・今・ここ〉と関連づけ、現在の予審の問題点にしている。このように、話者が〈私・今・ここ〉にアクチュアルに関係づけるときに完了過去が使われる傾向にある。コントラスト類例として、例：同じ予審場面で、ミーチャが Да, лучше в каторгу!.....И вот все, что я могу сказать,

и....., Ссылайте, казните,..... 徒刑になるほうがましだ! ...もう話せることはみんな話した。もうたくさんだ。...もうシベリア送りでも死刑でもしたらいい（第3部9編Ⅵ：p.438）。完了不定形 сказать で целостность 統括性で〈洗いざらい・すっかり〉を出し、完了命令形 Ссылайте, казните の性質〈動作の促し〉〈許容・放任→自暴自棄〉のコントラストになっている。読み手がどれだけコントラストを強く解釈し、完了体命令形を自暴自棄に解釈するか否か、で訳も命令形「...してください」ではなく、「勝手にしろ」のニュアンスになる可能性もある。なお、読み手の〈私・今・ここ〉からの〈梯子外し〉については、後述した（3.1.1のⅠ）。

2.2.4 統括力：

ボンダルコは指摘していないが、小稿では、完了過去の a. の性質により、連文を束ねる〈統括力をもつ文、トピック・センテンス〉を担うことがある（樫尾 2000 で、トルストイ『戦争と平和』の事例提示をした）。Он ясно и настойчиво передал нам（第3部9編Ⅵ：p.438）（資5）この文が小さい中心文の統括力・まとめる力があり、後続文で具体的、詳細を述べている。

2.2.5 〈...すべきことや予測されることをする／しない〉：

...произнес.... Не разобрали 私はちゃんとやったのに、あなたが分かろうとしなかったのです（第4部11編Ⅵ：p.46）。完了体によって言外に、自己正当化の機能を果たしている。снять（脱ぐ）（第3部9編Ⅴ：p.434の最後）は、完了不定形で〈必要性〉の意味で使われるが、その同一場面で完了不定形 неужели снимать（脱ぐ）（第3部9編Ⅵ：p.434）である。これは、あきれた気持ち〈неужели... だなんて〉の気持ちを込めたときに不定形は完了、という基本機能（磯谷 1977）である。後続の Я вас спрашиваю во второй раз : надо или нет снимать?（p.434）の снимать は文型そのもの（答えてくださいよ。私はさっきから質問しているんですから）により完了が出やすいが、このいらい感を示す文型が使われたことと、先行の完了過去形の否定形 не ответил 〈答えようとしなかった〉 = 〈予測されるのに、しない〉と完了不定形 надо или нет снимать? が広域対応関係にある。

3. 〈私・今・ここ〉をめぐるレベル差のある各種の視点Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

3.1『カラマーゾフの兄弟』の〈私・今・ここ〉をめぐる4つ（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ）の視点：

語り手（作家自身）が4つの視点を語っていないが、読み手が、Ⅰ「これは語り手としての作家の目からそう見えている、という書き方」、他方はⅡ過去のできごとが客観的に展開しているように書かれている・語り手である作家の顔は表面にはちらつかないと、感じられ、Ⅲとして「読み手が読み進めてきたその時点での登場人物自身の〈私・今・ここ〉。例えば、イワンは今現在こんな気持ちか、ミーチャはもはや自暴自棄になっている、などが感じられる。そして、それぞれの視点に対応する一定の客観的な言語形式（後述）が存在する、と考えられる。Ⅳ最後のエピローグ後

半は、特に、主人公アリョーシャのミニ演説で、文体が一変し、完了過去による〈私・今・ここ〉と未来への視点〈メッセージ性・呼びかけ〉とを〈組み合わせ〉ている。全編を通して、最初の3つの「視点」の不規則移行（Ⅰ→Ⅱ→Ⅰ→Ⅲ→Ⅱなど）がみられる。全編を通してⅠの語り手としての作者の〈私・今・ここ〉が、混在する。Ⅱにおいて、Ⅲの手法（完了過去による新たな事態の発生機能）が採られ、読み手に、登場人物の〈私・今・ここ〉を感じさせる。つまり、Ⅰ（主に、語り手はя=私、と名乗っている）が出てくると、読み手は、この個所は語り手としての作者の解説や感想、と解し、Ⅱ（小説の中身）が出てくるとストーリーとして読む、しかし、混在する完了過去Ⅲに出会うと、読み手はその時点での登場人物の〈私・今・ここ〉の心理や状況を捉える。

3.1.1 Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの〈私・今・ここ〉のテキスト視点機能：『カラマーゾフの兄弟』を例に

Ⅰ a. 語り手としての作者の〈私・今・ここ〉：言語形式は、不完了現在が〈参照枠〉である。語り手はこの「現在＝語り手の〈私・今・ここ〉」の視点から、できごとを語ることで、過去のできごとだという枠組みを読み手に一応意識させる。混在する過去形や未来形は、すべてこの語り手の〈私・今・ここ〉を基点にした視点移動にすぎない。つまり、〈参照枠〉は、語り手の〈私・今・ここ〉である。

b. 読み手の〈私・今・ここ〉からの〈梯子外し〉：同書にはいくつもの見せ場があるが、読み手の〈私・今・ここ〉（＝読み手はあたかもその場面の当事者として存在している、と感じる）が活性化し始めると、急に、a. が出現して、読み手の没入の〈梯子外し〉をして（資6）、読み手の〈私・今・ここ〉の活性化を冷却化する（例―第3部Ⅸ編Ⅱ：p411）（資6）。

Ⅱ 小説そのものの〈参照枠〉は過去時制である＝…だった・…していた：13年前のできごとを語る客観的な言語形式は、不完了過去が〈参照枠〉である。混在の完了過去や不完了現在は、不完了過去を基点の動作、因果関係、順次性、歴史的現在、語り手の現在（Ⅰ）である。

Ⅲ 小説内の登場人物などの〈私・今・ここ〉＝〈臨場感〉を完了体過去形で：登場人物の生起する心理や新事態の発生は完了過去になっている。13年前の過去のできごとだが、読み手は、〈参照枠〉として登場人物の〈私・今・ここ〉と新事態の〈いま・ここ〉を捉える。

Ⅳ 未来へ向けてのメッセージ機能：〈…しましょう〉＝共同行動へ誘う機能：特に、エピローグ最後の部分で、主人公アリョーシャのミニ・演説は、文体が一変し、語り手ドストエフスキーと対象人物が一体化したような〈主客合一〉（池上2000）が見られる。

3.1.2 I、II、III、IVの言語形式例

I 作家が立っている基本は、現在時制、つまり、〈参照枠〉は現在＝〈私・今・ここ〉である。言語形式例：p.5「著者より」（資7）**нахожусь** 私は今...の状態にいる；**знаю** 私は知っている；**выбрали** (あなたは) 選択した；**сделал** (主人公は) 成し遂げた＝統括的表現；**говорю** (私は今) 語っている、など；p.69（第4部11編IX）**я не доктор** 私は医者ではない+；**чувствую** 私は今感じている；（第4部12編I：p.89）**скажу** あらかじめ言っておくが；**я не считаю** 私は...だとは思っていない；**мне все кажется** 私は...な気がしている；**я запомнил** 記憶に残っている；**читатели сами поймут** 読者ご自身がお分かりだろう；重層的なのは、著者の裁判傍聴時の描写である。著者は事件の起こったこの街の住人であることになっていて、傍聴後の記憶を呼び起こして書いている、と断っているが、著者が今語りかけている時間軸は、読み手にとってIである。この現在視点が〈参照枠〉として機能しているため、過去の裁判の話しだが、読み手は廷内における自身の〈私・今・ここ〉の〈臨場感〉を活性化させることができる。

II 本文の〈参照枠〉は過去時制＝...だった・...していた：過去のできごとだが、I（語り手の〈私・今・ここ〉）が出現。言語形式例：a) **Алексей...был** третьим сыном（アレクセイは、...の三男だった）。b) **Теперь же скажу** об этом помещике (как... называли, хотя он всю жизнь ..не жил в своем поместье) лишь то, что это был странный тип....（資8）（（私は）今この地主（彼は当時そう呼ばれていた）について...を述べるにとどめる）。主文述語 **скажу** が語り手の時制である。読み手は〈読み手の今・ここ〉の時点において、語り手の〈私・今・ここ〉の時点からの過去の話を知っている、と捉えられる。

III 過去のできごとにおいて、生じた新事態は、完了体過去形：読み手は、登場人物の〈私・今・ここ〉を捉える。読み手自身もその場に〈私・今・ここ〉の〈臨場感〉を体験する可能性もある。例：**Алеша, войдя, сообщил.., что Марья..объявила, что Смердяков лишил себя жизни.**（アリーシャは入ってきて、スメルジャコフが自殺したと、マリアが言った、と伝えた）（第4部11編X：p.85）（資9）：**..открылось заседание и начался суд..** 裁判が開廷した（第4部12編I：p.89）（資9）この完了過去で、読み手の〈私・今・ここ〉が活性化し、前者では読み手もそのニュースを今耳にした、という効果をもち、後者の文から読み手も、臨場感〈私・今・ここ〉の感覚で傍聴する可能性がある。必ずしも〈私・今・ここ〉に直接関係しない、過去に属することが話題であっても、その過去の動作結果が、話者の〈私・今・ここ〉にとって無効ではなく、いまだアクチュアルで問題視すべきものであるときには、完了過去になる。例：裁判で刑事被告人ミーチャの弁護人のセリフ：**Что встретил мой клиент, приехав сюда к отцу?** 私の依頼人（ミーチャ）が父のところへ来た時、彼はどんな扱いをされたでしょうか？→完了体過去形によっ

て、ミーチャが父の家に来て心理的に受けた心の傷が、この裁判の席においてまだ有効性を保ち問題視すべき、結果残存効果を維持していることになり、読み手は、廷内に臨場し〈私・今・ここ〉を体験することが可能である（第4部12編Ⅲ：p.168）。

Ⅳ エピローグの後半以降に突如として現れる言語形式の基調

a. 未来へ向けての視点〈呼びかけ・メッセージ = ... しようではないか!〉

不完了体未来形の一人称複数形 = 〈共同行動へ誘う表現・... しようではないか!〉..., не будем никогда забывать друг об друге (エピローグ p.196)。(後半で反復提示)。この未来形と共に要所要所に潜伏した形で完了過去〈私・今・ここ〉を〈組み合わせ・配置〉している。

b. 未来への予言を示す (... になるだろう) = 完了/不完了未来形: издеваться будем など。

3.1.3 上記Ⅳは、書かれなかった作品「第二部」への橋渡しか（亀山 2007 参照）

ドストエフスキーが「著者より」で、この『カラマゾフの兄弟』は第一の小説であり、著者が重視しているのは、これではなく、第二の小説であり、アリョーシャ（三男）の現代、まさに私たちが今生きているこの時代の活動を描いた小説である、としている（資 10）。著者急死によりその第二の小説は書かれなかったため、第二の小説への橋渡し機能を担っていると思われる第一の小説エピローグのアリョーシャの「メッセージ」の言語形式、機能の〈組み合わせ・配置〉、および、〈参照枠〉から、書かれなかった「第二の小説」（亀山 2007）への〈橋渡し〉が推測される。先述のように、Ⅳは、言語形式、機能の点でふたつ（a. b.）になり、未来形が〈参照枠〉である。

a. 未来へ向けての視点〈呼びかけ・メッセージ = ... しようではないか!〉

この未来への視点はエピローグ（独立した形態で掲載）の最後に出てくる視点である。作者ドストエフスキーが「著者より」で「私の主人公」と名づけているアリョーシャが子ども達へ向かっての「メッセージ」が含まれていて、本文とは異なる文体であり、〈参照枠〉は未来形で、読む者に自ずと未来へのメッセージを印象づける。будем помнить 忘れないようにしましょう（間を空けて、3 回目は!をつけて反復（Эпилог: pp.195-196）。聴き手の子供達もこれを唱和→反復。反復は主題に関与することも少なくない。вспоминать будем 思い出しましょう。完了未来 Не забудем же его никогда 決して彼を忘れないようにしましょう。Эпилог: p.196)

なお、終わり近くの Неприменно восстанем, непременно увидим...расскажем!（必ずぼくらは よみがえるでしょう。必ず出会って愉快に楽しく語り合うでしょう）（Эпилог: p.197）（資 11）は、前文の質問 неужели и взаправду религия говорит, что мы все встанем из мертвых, и оживем, и увидим опять друг друга, и всех, и Илюшечку?（ぼくたちはみんな死者から 立ち上がってよみがえり、また互いに出会い、みんなに、イリユーシャにも会える、と宗教は言ってるけど、本当ですか?）への返答として「未来はこうなるでしょう」という完了未来形として機能している

が、「テキスト機能」から見ると、p.195 **восстал**（決起する・蜂起する）と同義の機能〈呼びかけ・メッセージ＝…しようではないか！〉をわざと〈潜伏させた表現〉、と解されることもあり得ないことではないだろう。それは5つの理由による。①完了未来形語尾 **-ем -им** は、コンテキスト次第では、a〈呼びかけ・メッセージ〉も、b〈未来はこうなる〉として機能するときも同形である。コンテキストを読み手がどう把握するかによってa、bが左右される。丸ごとのテキスト全体、可能なら、著者の全作品、全人生を背景にして考えることを理想としている分析者の場合、このロシア語文が単に前文の返答とだけ対応している、とは読まない可能性もある（ヴォールギン 1990 参照）。②、③、④などの複数要因を視野に入れる可能性もある。特に、ドストエフスキーは、晩年まで検閲を恐れていて検閲に引っかからないように、表現に注意を払ったとの分析がある（ヴォールギン 1990）。②動詞 **восстать** は、p.195 で少年イリュエシヤが父のために“行動を起こす・立ち上がる・決起する・闘争に立ち上がる”の意味として使用されている。しかも、その“立ち上がった行動”に対して、著者は好意的である。③「…あの子は以前、石をよくぶつけられていました（＝不完了過去＝以前性・反復行為）。…でも、あの子は後からはみんなに愛されるようになりました（**все его полюбили**＝完了過去＝新事態の生起・始まり）。あの子は立派な子でした。（略）勇敢でした。（略）父親が受けている惨めな思いは、以前から感じていたのです（**чувствовал**＝不完了過去形＝背景・先行性となる原因）。それに対して **восстал** したのです（＝完了過去形＝背景になる原因・理由があって、新たな事態が生起→不完了過去形＋完了過去形＝因果関係）。話者の評価も一部入っているが、一応話者は事実として述べている。④それに対して後続文で「だから、まず第一に、この子のことを、みなさん、生涯、忘れないでいましょう。」と〈呼びかけ・メッセージ〉を送っている。これは、「テキスト機能」においては、事実を挙げてからそれに対して何かを後続させる時、単なる〈いい悪い・好悪・妥当性の「評価」〉よりも、〈呼びかけ・メッセージ〉での結句のほうが、より統括力も強く、読み手への働きかけが一般的には強い、とされている（佐久間 2003）。つまり、このテキストでは、惨めな状況に対して立ち上がる、という事実に対して、読み手に直接的に強く作用する言語表現を用いている、可能性がある。④さらに、終わりにかけて、同様のことを反復提示している（p.196）。**Будем помнить и лицо его, (略) и беденькие сапожки его, и гробик его, и несчастного грешного отца его, и о том, как он смело один восстал на весь класс за него!**（忘れないことです。あの子の顔も、（略）みすばらしい靴も、あの子の小さな棺も、あの子のほめるところが何もない不幸なお父さんも、そして、あの子が勇敢に一人でクラスみんなを相手に立ち上がったことを！）。反復表示は話し手・書き手の最大の主張と無関係ではない。⑤別の少年コーリヤの言葉 **«Хочу пострадать за всех людей»**（自分を犠牲にしてみんなのために役立ちたい）を演説者アリョーシヤは引用しているが、この引用箇所（p.195）に後続する連文のかかなりの範囲（p.196の半分以上）まで関係性を維持し、**Господа, ..будем..умны, смелы и великодушны, как Коля (но который будет гораздо умнее, когда подрастет)** コーリヤのように賢く勇敢になろうという〈共同行動への誘い〉表現で〈メッセージ〉を出している。「テキスト機能」から見ると、こうした〈関

係領域が広いことも話し手・著者の主題に関与〉することがある、とされている（佐久間 2003）。
 может быть, вы не поймете, что я вам скажу, потому что я говорю часто очень непонятно
 (p.195) (私の言うことが、君たちには分からないかもしれない、私はしばしば分かりにくい話し方をするから)、という表現も、〈隠された意味〉を捉えてほしい、ということを暗示している、と解する読み手もあり得よう。または、〈間テキスト〉の関係性から、読み手がテキスト内の意味を個別テキストで見るのではなく、著者に関する全体（作品・人生すべてについて）の研究成果を視野に入れて（ヴォールギン 1990、亀山 2007）個別テキストに接する場合と、個別テキストのみで判断する場合とでは、解釈に差が出てくる。エピローグ最後のメッセージに、完了過去 **восстал** による〈私・今・ここ〉を〈未来へのメッセージ・… しようではないか **восстанем**〉と巧妙に〈組み合わせ・配置〉し、一見したところ、ドストエフスキー自身が主人公アリョーシャの名を借りて、ロシア社会の歴史的動乱状況に生きる若者達に呼びかけている、語り手と主人公が合体している〈主客合一〉、とも見える。一方、キリストを敬愛しテロ、暴力革命は奈落の道とし、暴力革命で得た社会は早晚崩壊する、としていたドストエフスキー（ヴォールギン 1986/1990: p.582-583）が、あえて、自身の最愛の主人公の演説に第一の小説で **восстал, восстанем** を“蜂起する”の意味で潜伏させながら、第二の小説でその最愛の主人公に奈落の道へ突き進む役割（テロリスト、または、その賛同者）を付与することで、社会の矛盾をテロで一気に解決できるとして処刑されることを厭わなかった若者の性急な正義感を、心痛を抱いて否定的に描く予定であった、などいくつかの見方がありえよう（亀山 2007 『「カラマゾフの兄弟」続編を空想する』参照）。

b. 未来への予言を示す（私たちは… になるだろう）

終わり近くの **Непременно восстанем, непременно увидим...расскажем! всех вас заключу в мое сердце!** は、前文の質問への返答として「未来はこうなる」という完了体未来形として機能しているが、「テキスト機能」から見ると、a. 〈呼びかけ・メッセージ〉（… しようではないか!）を〈潜伏させた表現〉、ととることもあり得ないことではないだろう（先述）。

ドストエフスキーは『カラマゾフの兄弟』完成の半年前（つまり、執筆時期）にロシア最大の詩人とされるプーシキン像記念講演を行い聴衆に感銘を与えた（ヴォールギン 1990、亀山 2007）ということだが、この小説内のアリョーシャのミニ演説の完了体未来形多用にも、作者によるプーシキン記念講演の口吻の一端が残っていたのではないかと想像させる高い調子の文体である。

3.2 チューホフ作 短編「おおさわぎ」の二つの視点

採り上げる作品の個所（資 12）は、富裕な家の女主人の宝石がなくなったため雇われている人間すべて（玄関番、料理人、小間使い）が疑われ調べられる場面である。マーシェンカという雇われ家庭教師は女主人の宝石がなくなったことも自分も疑われているという事実も知らない。しかし、彼女の留守の間に、無断でマーシェンカの部屋が、女主人に搜索されていた。マーショエンカが帰

宅し自分の部屋に入って、その女主人が捜索中である姿に驚愕する。女主人はマーシェンカが入ってきたので、「袖で引っかけてひっくり返してしまった」と言い訳して部屋を出る。マーシェンカは自分の部屋を啞然として見回す。

①作家による過去の視点____部分：不完了過去、および、完了由来の受動分詞短語尾過去形

②登場人物の〈私・今・ここ〉の視点____部分（または、読み手の〈私・今・ここ〉にも波及する可能性がある）

：完了過去、および、完了由来の受動分詞短語尾現在形

①は、できごとを作家による過去の視点から、と読み手に解釈される。②は主人公マーシェンカという雇われ家庭教師の〈私・今・ここ〉の視点で語り手が語っている、と読み手に解釈される可能性もある。完了過去、および、完了由来の受動分詞短語尾現在形が多い。

..Машенька вошла в свою комнату（マーシェンカは自分の部屋に入った＝完了過去のため、読み手も、一緒に入る感覚になるが、読み手はまだ過去のこととして読んでいる）ей в первый раз в жизни пришлось испытать во всей остроте чувство, которое так знакомо людям зависимым..живущим на хлебах у богатых и знатных.（彼女は、富裕で高貴な人たちの家で暮らす従属した人々だけが知っている身を切るような感覚をいやでも味わうことになった＝完了過去形＝今、この時点での新事態の生起＝マーシェンカの〈私・今・ここ〉であるため、読み手の〈私・今・ここ〉も徐々に動きは始める可能性がある。しかし、作家による過去の視点が続く。В ее комнате делали обыск 捜索が行われている最中だった＝不完了過去＝作家による過去の視点 Хозяйка стояла その時立っていた＝不完了過去＝作家による過去の視点。вкладывала. 投げ入れていた＝作家による過去の視点。появление гувернантки было.... だった＝不完了過去＝作家による過去の視点。Машенька..похолодела 今この時点でぞっとした＝マーシェンカの新たな心理の生起、マーシェンカの〈私・今・ここ〉。Что.... искала? 何を捜していたのか＝不完了過去＝作家による過去の視点）ここまでは、①、②が混在している。この後に、唐突に、現在形（完了体由来の受動分詞短語尾現在形）が挿入される。

...Зачем у стола ..выдвинут один ящик?（なぜ、今この時点で引き出しがひとつ開けっ放しになっているのか。）

この現在形は主人公マーシェンカの〈内言〉（バフチン 1963、茂呂 1999）、つまり、女主人の言い訳に対する疑問の応答が〈内言〉で表現されている。②〈私・今・ここ〉の視点として、読み手に解釈される。прятала 隠しておいた＝不完了過去＝作家による過去の視点。была отперта 開いていた・開けられていた＝作家による過去の視点。Его отперли, но запретить не сумели 開けたまま、閉めることができなかったのだ。完了過去＋完了過去＋...＝動作の順次性、および、主人公マーシェンカの〈私・今・ここ〉、今の時点における結果残存。同じく、хотя исцарапали（完了過去形＝今、引っかき傷がある＝今の時点における結果残存・主人公マーシェンカの〈私・今・ここ〉の視点。все носило,すべてが...の形跡を残していた＝不完了過去。作家による過去

の視点。Белье было сложено (畳んであった = 作家による過去の視点)。Что случилось? (今、ここで何が起きているのか = 完了過去 = 主人公マーシェンカの〈私・今・ここ〉)? Машенька вспомнила.. 今思い出した = 完了過去 = 主人公の〈私・今・ここ〉。...не имело ли все это связи..? (不完了過去 = 作家による過去の視点)。Не замешана ли она 彼女は今、現在、...に巻き込まれているのではないかと она で作家視点の体裁をとっているが、テキスト機能では完了由来の受動分詞短語尾現在形のため、主人公の〈私・今・ここ〉の視点と解釈され得る。その場合、“она”の訳は、“自分は”と訳し得る。テキストには、①、②が混在するが、〈参照枠〉は完了過去形 = 〈私・今・ここ〉のため、完了由来の受動分詞短語尾現在形は、強く、〈私・今・ここ〉を読み手に感じさせる。多少過去の描写があっても、全体として、読み手は〈私・今・ここ〉を常時感じる事が可能である。松下 (1994) も имело ли = 過去を現在形で訳している。

..выдвинут 今この時点で開けっ放しになっているのか。Не замешана ли 事件に巻き込まれているのではないかと。主人公マーシェンカの〈私・今・ここ〉の視点。Не замешана ли она は、テキスト機能としては、она=я マーシェンカの〈私・今・ここ〉であり、これも、茂呂 (1999) が分析する〈内言化〉に相当するのではないかと。女主人の発話に対する主人公の〈私・今・ここ〉の内面の応答・対話を〈内言〉として読み手が解することで、読み手の〈私・今・ここ〉も活性化し生き生きしたものになる。作家チャーホフによる〈主客合体〉(池上 2000) 手法が無意識に採られているのではないかと。この作品初出 1886 年は、語り手チャーホフが弱冠 26 歳でその後、初出の主人公のむき出しの怒り声も削除された。最後の 1 行 Через полчаса она была уже в дороге 30 分後に彼女はもう旅の人になっていた。つまり、行く当てもないのに雇用先を出たことが加筆され、抑制された凛とした女性像になっている。完了体の配置の補助効果により、作家自身が主人公に寄り添っている印象を読み手に与える。桑原 (1950) が優れた作品について、「作者がその扱う対象に強烈なインテレストをもっていて、対象を虚心に冷やかに眺めているに耐えなかった」から読み手にもそれが伝わり読み手は「再経験」できることを指摘しているように、読み手は、過去形の中に突如〈配置〉された現在形 выдвинут や не замешана ли に、主人公の〈内言〉を読み取ることによって、26 歳の作者が自分の主人公に無意識に共感していることを感じる可能性がある。池上 (2000) の日英語分析から見て、ロシア語は〈唐突な現在形挿入〉の点で、日本語テキストに近いのではないかと。

おわりに

池上 (2000) は、日本語の話し手が「臨場し、直接〈いま〉、〈ここ〉で身を持って体験している」という「〈元型〉的な体験の構図への拘り」を「西欧的な言語の話し手と較べてかなり多く保持」している、と分析しているが、日本語母語者がロシア語テキストを読むときにもあてはまることではないかと。ロシア語テキスト著者達も、自身のテキストが読み手自身の〈私・今・ここ〉が活性化

されて読まれることを拒否していないのではないかと推測される。しかし、その言語形式に担わされた〈隠れた膨大な機能〉を、外国人読み手は読み解かなければならない。ロシア語テキストに接したときに読み手が陥る〈私・今・ここ〉を探る時に、完了過去、および、それ由来の受動分詞短語尾現在形の〈配置〉、〈参照枠〉という〈結果的に出てくる機能〉を、〈テキスト機能〉の一要素として考えることも有効ではないか。加えて、読み手の〈私・今・ここ〉の活性化を強めるだろう要因として、〈内言〉の〈私・今・ここ〉の機能も小さくないと思われる。一方、『カラマーゾフの兄弟』の「エピローグ」における動詞未来形が、主人公の姿を借りて作者が子どもたちに語りかけている、または、チャーホフの完了由来の受動分詞短語尾現在形のテキスト内配置の作家自身には無意識な演出効果が、読み手の〈私・今・ここ〉の一層の活性化を促す、と解されるなら、〈私・今・ここ〉を分析する際に個別テキストではなく、間テキスト的にできるだけその著者の作品の全体像を、〈主客合一〉（池上 2000）の観点から見る必要があるだろう。

桑原（1950）が、優れた作品について、「作者は人物の中へ入って行動することができる。…それを受ける読み手は、感動し（その人物の体験を）再経験できる。…あたかも現実の体験によるのと同じように、時としてはかえってそれ以上につよく、精神の変革をうけることなのである」と分析している。この言葉は、読み手の〈私・今・ここ〉や〈内言〉に通じるものがある。

小稿冒頭で、言語形式という客観的な事例を元に考えたい、としたが、言語形式は客観的であってもその〈組み合わせ・配置〉、および〈参照枠〉（池上 1986）が生む〈結果効果〉について、客観的／主観的解釈の競合は避けられず、批判や助言を受けながら、今後の課題としたい。

（かしお しょうこ・本学非常勤講師）

注：〈内言〉をバフチン（1963/2002）を参考に簡単にまとめると、他者の発話、言葉を自分の内面に反映させて内面で一人二役を演じながら無言のまま他者と内面で論争・対話したり、自己の矛盾する内面の二つの声を内面で論争・対話させそこにさらに他者の発話を反映させることをさす、と考えられる。

茂呂（1999）は〈内言〉を、他者や状況とのダイナミックな内的対話とし、ヴイゴツキー（1934）は、相手の発話や状況を提題表現（＝テーマ）に、自己がそれに対して叙述表現（＝レーマ）の形態で〈内言〉において対話する、としているものと考えられる。

〔出典〕 および〔参考文献〕

Д. Волкогонов (1989) «Триумф и трагедия» Москва Изд. Агентства печати Новости

Ф. Достоевский (1880/1976) «Братья Карамазовы» «Полное собрание сочинений в тридцати томах» тт.14-15 Изд. «Наука» Лен. отд.Лен.

А. Чехов (1886/1984) <Переполюх> т.4. «Полное собрание сочинений и писем в тридцати томах» М. Изд. Наука

池上嘉彦（1986）「日本語の語りのテキストにおける時制の転換について」『記号学研究』6 東海大学出版会

———（1991）『〈英文法〉を考える 〈文法〉と〈コミュニケーション〉の間』筑摩書房

———（2000）『「日本語論への招待」』講談社（改題して2007年「ちくま学芸文庫」でも刊行）

———（2003-2004）「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標（2）」『認知言語学論3』ひつじ書房

- (2006) 「〈主観的把握〉とは何か—日本語話者における〈好まれる言い回し〉」『言語』5 大修館
磯谷 孝 (1977) 『演習ロシア語動詞の体』吾妻書房
浦 雅春 (2004) 『チェーホフ』岩波新書
樫尾頌子 (1998) 「ロシア語テキストにおけるアスペクト機能」『高崎経済大学論集』第41巻第1号
—— (2000) 「ロシア語アスペクトのテキスト機能」同誌第42巻第4号
—— (2004) 「ロシア語テキストに現れるアスペクトの実例とその機能分析」(試論) 同誌47巻第3号
亀山郁夫 (2006) 「読書ガイド」および訳 ドストエフスキー 『カラマーゾフの兄弟 1』光文社古典新訳文庫
—— (2006) 「読書ガイド」および訳 「『カラマーゾフの兄弟 2』」
—— (2007) 「読書ガイド」および訳 「『カラマーゾフの兄弟 3』」
—— (2007) 「読書ガイド」および訳 「『カラマーゾフの兄弟 4』」
—— (2007) 「ドストエフスキーの生涯」、解題「『父』を『殺した』のはだれか」『カラマーゾフの兄弟 5』
—— (2007) 『カラマーゾフの兄弟』続編を空想する』
桑原武夫 (1950) 『文学入門』岩波新書
佐久間まゆみ編 (2003) 「文章・談話における『段』の統括機能」『日本語講座第7巻文章・談話』朝倉書店
佐藤純一 (1982) 「ロシア語」『講座日本語—外国語との対照—』明治書院
中澤英彦 (1994) 『初めて学ぶロシア語 русский язык для японцев』語研
沼野充義 (1993) 『NHK 気軽に学ぶロシア語』NHK 出版
原 求作 (1998) 『ロシア語の体の用法—練習問題』水声社
松下 裕 (1994) 『チェーホフ全集 3』ちくま文庫 筑摩書房
茂呂雄二 (1999) 『具体性のヴィゴツキー』『認識と文化』全14巻の中の第6巻 金子書房
D. ヴォルコゴノフ (生田真司訳) 『勝利と悲劇』上・下、朝日新聞社、1992
M. Бахтин (1963/2002) «Проблемы поэтики Достоевского» Собрание сочинений в семи томах т.6 И-т миров.
лит. Рос.акад. М. Рус.словари. яз.славян..кул. pp.205-207, 237, 284-290
—— (1929/2000) «Проблемы творчества Достоевского» Собрание сочинений в семи томах т.2 И-т
миров.лит. Рос.акад. М. Рус.словари pp.157-173
A. Бондарко (1996) «Проблемы грамматической семантики и русской аспектологии» Санкт-Петербург Изд.
С-Петербургского университета
И. Волгин (1986/1990) «Последний год Достоевского» М. “Известия” pp.546, 550, 562
Л.С. Выготский (1934/2007) «Мышление и речь» М. Лабиринт pp.311-343

[資料]

- 1 А в это время шел мюнхенский съезд... Сталин понял, что боязнь “коммунистической заразы” будет сильнее голоса рас-судка. И он не ошибся.

Чехословацкое правительство в сложившихся условиях не сумело поставить национальные интересы выше классовых.

Итак, когда Сталин убедился, что англо-франко-советские переговоры не дают быстрых результатов (а он и не очень ве-рил, что они приведут к положительному решению), “вождь” вернулся к “германскому варианту”, который настойчиво пред-лагал Берлин.

(100) English Semitic Oriental Romance Russian



R. B. Kaolan "Cultural Thought Patterns in Intercultural Education" (1966) を池上 (1991) より引用

- 2 Что встретил мой клиент, приехав сюда к отцу? И зачем, зачем изображать моего клиента бесчув-ственным, эгоистом, худшиком? Он безудержен, ой дяк и буен, вот мы теперь его судим за это, а кто виноват в судьбе его, кто выно-сят, что при хороших наклонностях, при благородном чувстви-тельном сердце он получил такое нелепое воспитание? Учил ли его кто-нибудь уму-разуму, провещен ли он в науках, любил ли кто его хоть сколько-нибудь в его детстве? Мой клиент рос покровитель-ством божьим, то есть как дикий зверь. Он, может быть, жаждал увидеть отца после долголетней разлуки, он, может быть, тысячу раз перед тем, вспоминая как сквозь сон свое детство, отгонял отвратительные призраки, приснившиеся ему в его детстве, и всею душой жаждал оправдать и обнять отца своего! И что ж? Его встре-чают одними циническими насмешками, подозрительностью и криво-котворством из-за спорных денег;

- 3 — Чего вадыхаешь, ведь ты знал? — прямо брякнул Иван Федорович.

А объявляя вам про эти ступи, по которым к покойному можно было войти, и что они Дмитрию Федоровичу через меня все известны, думаю, что вы уже сами тогда догадаетесь, что они что-нибудь непременно совер-шат, и не то что в Чермашню, а и вовсе останетесь.

— А я, признаться, тогда подумал, что вы уж совсем дога-дались. — с самым простодушным видом отпарировал Смер-дяков.

— Ну-с, а я-то думал, что вы, обо всем догадавшись, скорее как можно уйдете лишь от греха одного, чтобы только забежать куда-нибудь, себя спасая от страха-с.

— Ты думал, что все такие же трусы, как ты?

— Простите-с, подумал, что и вы, как и я.

И, однако, две недели спустя после первого к нему посещения начали его опять мучить всё те же странные мысли, как и прежде. Довольно сказать, что он беспрерывно стал себя спрашивать:

— енаки, подумал ты тогда, что я желаю смерти отца, или нет?

— Подумал, — тихо ответил Алеша.

— Говори же! — воскликнул Иван. — Я изо всей силы хочу знать, что ты тогда подумал. Мне надо: правду, правду! — Он тя-желю перевел дух, уже заранее с какою-то злобой смотря на Алешу.

— Прости меня, я и это тогда подумал, — прошептал Алеша.

— Да разве я знал тогда про убийство? — вскричал наконец Иван Федорович.

— А об том «ином прочем» я сею минутой разушел, что вы, пожалуй, и сами очень желали тогда смерти родителя вашего.

— Так ты, подлец, подумал тогда, что я заодно с Дмитрием хочу отца убить?

— Мыслей ваших тогдашних не знал-с, — обижено проговорил Смердяков, — а потому и остановил вас тогда, как вы входили в ворота, чтобы вас на этом самом пункте испытать-с.

— И я тоже подумал тогда, минутку одну, что и на меня тоже рассчитываете, — насмешливо оскарбился Смердяков, — так что, тем самым еще более тогда себя предо мной обличали, ибо если предчувствовали на меня и в то же самое время уезжали, значит, мне тем самым точно как бы сказали: это ты можешь убить родителей, а я не препятствую.

— Подлец! Ты так понял!

— А всё чрез эту самую Чермашню-с. Помилосердитесь! Собираетесь в Москву и на все просьбы родителя ехать в Чермашню отказались-с! И по одному только глупому моему слову вдруг согласились-с! И на что вам было тогда соглашаться на эту Чермашню? Коли не в Москву, а поехали в Чермашню без причины, по одному моему слову, то, стало быть, чего-либо от меня ожидали, для чего я тогда поехал в Чермашню? Для чего, для чего? — спрашивал Иван Федорович. — Да, конечно, и чего-то ждала-с.

«Да, я этого тогда ждал, это правда! Я именно хотел убийства! Если б убил не Дмитрий, а Смердяков, то, конечно, я тогда с ним солидарен, ибо я подбивал его. Подбивал ли я его — еще не знаю. Но если только он убил, а не Дмитрий, то, конечно, убийца я.»

Убил отца-он, а не брат. Он убил, а я его научил убить...

Кто не желает смерти отца!... О Смердякове он не расспрашивал больше ни у кого, но слышал-мельком, раза два, что тот очень болен и не в своем рассудке. «Кончит сумасшествием», — сказал раз про него молодой врач Варынский, и Иван это запомнил.

своим партнерам, и те его поздравили, смеясь, с находкой. При сем прокурор и следователь очень хорошо запомнили, что доктор прибавил самым решительным тоном, что Смердяков до утра не доживет. (第3回 第5章, p. 41)

«Потому ли, что в душе и я такой же убийца?» — спросил было он себя.

— Идите домой, не вы убийца.

Иван недогадал, кому вспомнился Алеша.

— Я знаю, что не я... — продолжал было он.

— Зна-е-те? — опять подхватил Смердяков.

— Говори всё, гадина! Говори всё!

Смердяков несколько не испугался. Он только с безумною ненавистью приковался к нему глазами.

— Ан вот вы-то и убийца, коль так, — яростно прошептал он ему.

Вы убийца, вы главный убийца и есть, а я только вашим приспешником был, и по слову вашему дело это и совершил.

— Совершил? Да разве ты убил? — похолодел Иван.

— Итого только вместе с вами-с; с вами вместе убил-с, а Дмитрий Федорович как есть безвинный-с.

то всё же вы виновны во всем-с,

ибо про убийство вы знали-с и мне убить поручили-с, а сами, всё знавши, уехали. Потому и хочу вам в сей вечер это в глаза доказать, что главный убийца во всем здесь единый вы-с, а я только самый не главный, хоть это и я убил. А вы самый законный убийца и есть!

4 Митенька вспоминал потом, что в ту минуту уловил как бы некоторое невольное и гордое презрение к этому посланию из Сибиря в лице самой Грушеньки.

— Я знаю, ты хоть и зверь, а ты благородный, — тяжело выговорила Грушенька, — надо, чтоб это честно... впрямь будет честно... и чтоб и мы были честные, чтоб и мы были добрые, не звери, а добрые... Увези меня, увези далеко, слышишь... Я здесь не хочу, а чтобы далеко, далеко...

своим партнерам, и те его поздравили, смеясь, с находкой. При сем прокурор и следователь очень хорошо запомнили, что доктор прибавил самым решительным тоном, что Смердяков до утра не доживет. (第3回 第5章, p. 41)

О Смердякове он не расспрашивал больше ни у кого, но слышал-мельком, раза два, что тот очень болен и не в своем рассудке. «Кончит сумасшествием», — сказал раз про него молодой врач Варынский, и Иван это запомнил.

(第4回 第15章 第2段, p. 56)

5 Он ясно и настойчиво передал нам, очнувшись, на расспросы наши, что в то еще время когда, выйдя на крыльцо и заслышав в саду некоторый шум, он решился войти в сад чрез калитку, стоящую отпертою, то, войдя в сад, еще прежде чем заметил вас в темноте убегающего, как вы сообщили уже нам, от отворенного окошка, в котором видели вашего родителя, он, Григорий, бросив взгляд налево и заметив действительно это отворенное окошко, заметил в то же время, гораздо ближе к себе, и настежь отворенную дверь, про которую вы заявляли, что она всё время, как вы были в саду, оставалась закрытою.

6

И только уже в пятом часу утра, почти на рассвете, прибыло всё начальство, исправник, прокурор и следователь, в двух экипажах и на двух тройках. Доктор же остался в доме Федора Павловича, имея в предмете сделать наутро вскрытие трупа убитого, но, главное, заинтересовался именно состоянием большого слуги Смердякова: «Такие ожесточенные и такие длинные припадки падучей, повторяющиеся беспрерывно в течение двух суток, редко встретившись, и это принадлежит науке», — проговорил он в возбуждении отъезжавшим своим партнерам, и те его поздравили, смеясь, с находкой. При сем прокурор и следователь очень хорошо запомнили, что доктор прибавил самым решительным тоном, что Смердяков до утра не доживет.

Теперь, после долгого, но, кажется, необходимого объяснения мы возвратились именно к тому моменту нашего рассказа, на котором остановили его в предыдущей книге.

7

ОТ АВТОРА

Начиная жизнеописание героя моего, Алексея Федоровича Карамазова, находясь в некотором недоумении. А именно: хотя я и называю Алексея Федоровича моим героем, но, однако, сам знаю, что человек он отнюдь не великий,

8

Алексей Федорович Карамазов был третьим сыном помещика нашего уезда Федора Павловича Карамазова, столь известного в свое время (да и теперь еще у нас припоминаемого) по трагической и темной кончине своей, приключившейся ровно тринадцать лет назад и о которой сообщу в своем месте. Теперь же скажу об этом «помещике» (как его у нас называли, хотя он всю жизнь совсем почти не жил в своем поместье) лишь то, что это был странный тип, довольно часто, однако, встречающийся, именно тип

9

Алеша, войдя, сообщил Ивану Федоровичу, что час с небольшим назад прибежала к нему на квартиру Марья Кондратьевна и объявила, что Смердяков лишился себя жизни.

На другой день после описанных мною событий, в десять часов утра, открылось заседание нашего окружного суда и начался суд над Дмитрием Карамазовым.

Скажу впрямь, и скажу с настоятельностью: я далеко не считая себя в силах передать всё то, что произошло на суде, и не только в надлежавшей полноте, но даже и в надлежавшем порядке. Мне

10

Главный роман второй — это деятельность моего героя уже в наше время, именно в наш теперешний текущий момент. Первый же роман произошёл еще тринадцать лет назад, и есть почти даже и не роман, а лишь один момент из первой юности моего героя.

Он был славный мальчик, добрый и храбрый мальчик, чувствовал честь и горькую обиду отцовскую, за которую и восстал.

платье мои деточки, может быть, вы не поймете, что я вам скажу, потому что я говорю часто очень непонятно, но вы все-таки запомните и потом когда-нибудь согласитесь с моими словами.

Может быть, мы станем даже злыми потом, даже пред дурным поступком устоять будем не в силах, над слезами человеческими будем смеяться и над теми людьми, которые говорят, вот как давеча Коля воскликнул: «Хочу пострадать за всех людей», — и над этими людьми, может быть, злобно надеваться будем.

— Будем помнить и лицо его, и платье его, и беднякские засоски его, и гробик его, и несчастного грешного отца его, и о том, как он смело один восстал на весь класс за него!

11

— Карамазов! — крикнул Коля, — неужели и заправду религия говорит, что мы все встанем из мертвых, и оживем, и увидим опять друг друга, и всех, и Илюмечку?

— Непременно восстанем, непременно увидим и весело, радостно расскажем друг другу всё, что было, — полусмеясь, полу в восторге ответил Алеша.

12

Что

Федосья Васильевна искала в ее сумке? Если действительно, как она говорит, она нечаянно зацепила рукавом и рассыпала, то зачем же выскочил из комнаты такой красивый и вдовольнавший Николай Сергеевич? Зачем у стола слегка выгнули один плечик? Кошпика, в которую гувернантка прятала гривенники и старые марки, была отперта. Ее отперли, но запретить не сумели, хотя и исцарапали весь замок. Этакерка с кидками, поверхность стола, постель — всё носило на себе свежие следы обыска. И в корзине с бельем тоже. Белье было сложено аккуратно не в том порядке, в каком оставил его Машенька, уходя из дому. Обыск, значит, был настоящий, самый настоящий, но к чему он, зачем? Что случилось? Машенька вспомнила волнение швейцара, переполох, который всё еще продолжался, заплаканную горничную; не имело ли всё это связи с только что бывшим у нее обыском? Не замешана ли она в каком-нибудь страшном деле? Машенька побледила и вся холодная опустела на корзину с бельем.